

318 箏に レゴロ

震う命の  
白練の  
輝き眩し  
初秋の釣

323 竹林の

大きなしなり  
目前に  
南風いたり  
心華やぐ

328 備え終え

湯舟に聞ける  
除夜の鐘  
主婦の喜び  
替え難かりし

319 星々を

数えし暮れし  
幼き日  
今日も明星  
輝きつあり

324 タケカンパ

掃ちりて過る  
風の音に  
紋織着  
想い出でけり

329 足摺の

椿の林  
わんざめく  
目白の群れに  
春は近づく

320 初夏の夜

蛙の声は  
祭々と  
空気に満ちて  
月に届けり

325 小春日の

岸辺の海  
潮騒に  
心は遠く  
拡がりゆきぬ

330 母に似し

眼差しなりと  
確信す  
我眼差しよ  
嬉しかりけり

321 風田吹きの

炎の彩の  
舞やかれ  
闇の深みの  
際立ちぬ

326 汝おちた

舞る時を  
遠ひしか  
小春の空に  
雲雀上がれる

331 汝みゆく

夕陽を見つつ  
友抱と  
語り尽せし  
青春の夢

322 其の上は

母の頬に  
潤みいし  
宵の明星  
美しきかな

327 田舎野へ

黙し歩めば  
松籟と  
潮騒の中  
我浴げゆけり

332 白鹿風は

靡く青田の  
その上は  
翔ひ交う燕  
心弾めり

333 燕は 南の邦の  
明るきを  
伴い来る  
春雨の朝

338 冬歸り  
憧れ離れ  
せしとせむ  
差し出されたる  
儂しうし手

343 三嶺に  
立ちは湧きくる  
いとおしち  
我存在  
次の頂き

334 一塵は  
捨つてきまのふ  
知りながら  
なお懐かしき  
故郷の冬

339 非は  
形にあらす  
来ごと  
腑に落ちにけり  
秋晴れの朝

344 嶺空より  
大いなる腕  
伸び来り  
抱き上げられし  
原始の記憶

335 燕は  
育ちて南  
指し行きて  
庄の奥には  
秋風満てり

340 冬往ち来  
地球はいまや  
来復の  
光の中に  
進み入りたり

345 川の風の  
なぐすの命  
奏むる  
言葉探して  
歳経りにけり

336 心癒え  
心疾ひく  
わかれきを  
求めて春の  
小川に行てり

341 霧入り  
光は強く  
明らかぬ  
寒たる風に  
踏み出す朝

346 虫雷風だ  
黒潮の香を  
嗅ひ来し  
水平線の  
青き雲みよ

337 大海を  
廻り渡り  
川の岸に  
送り着きたる  
鴨に会へり

342 風が  
季節は空を  
渡りきて  
河口に真鴨  
点滅したり

347 静かなる  
天の風は  
流れて  
我等は今日も  
汗を流さむ

348 満ち足りて  
いながら知らぬ  
同朋を  
貧しきものと  
人の言うあり

353 雨の音  
優しくなりて  
春深し  
いのち静かに  
伸びゆきにけり

東の間かかる  
虹の橋  
つかのま故に  
渡りかねたり

349 人は皆  
ひとりぼっちの  
旅人か  
会うこともなく  
擦れ違つのみ

354 麦の芽の  
わずかに芽ぐむ  
黒土に  
名残の雪の  
かかりてありき

359 朔風に  
携む櫂の  
木末には  
光宿りて  
春は兆しぬ

350 苦しみつ  
尚働けば  
ゆくりなく  
心の奥に  
南風のたつ

355 草に臥し  
仰ぎ見上げる  
宏き空  
積乱雲の  
膨発しおり

360 白南風が  
海水浴の  
歓声を  
遠く運び来  
梅雨明けの午後

351 我人生は  
宇宙への旅  
故郷へ  
共鳴しつつ  
回帰せんとす

356 励ましの  
言の葉遣し  
駆け行けり  
みんなちがつて  
みんないいよと

361 燈を  
高く明るく  
灯しなば  
汝が人生は  
ゆめ無駄ならじ

352 権徳の  
林を田びつ  
光満つ  
大洋の岸に  
我屹立す

357 戀こむ  
言葉し適し  
身罷りぬ  
私ではなく  
何故あなたと

362 故郷の  
岬に佇む  
一本の  
樹となりたしと  
想う日のあり

358 夕立後

363 心して

苦惱の河を  
渡れかし  
往きし縁の  
人の夢負ひ

冬の昂の  
輝きと  
通底しおる  
現象なるか

室戸の浜の  
潮騒に  
交がりて届く  
宇宙の響き

364 もう一人

汝が分身を  
雲に載せ  
俯瞰さすべし  
汝の日々を

369 内職の

顕微写真を  
見詰め居て  
我は立ちおり  
アンドロメダに

374 秋霖の

上がりて今朝は  
玲瓏の  
光の中に  
蜻蛉舞いおり

365 人生に

舞る雨風  
睡上り  
受け止めるべし  
全ては過ぎる

370 何時迄も

若くはないと  
傍を  
吹き過ぐ風の  
耳打し筒

375 ぐへいなく

席捲られし  
朝の駅  
歳相応に  
老いにけるかも

366 汝が人生は

試験管なり  
一本の  
慈悲の心根  
道伝子たるか

371 春雷が

啓示もたらす  
雨水の夜  
全て与えぬ  
手をば伸ばせと

376 扱れるな

空は君故  
いや背く  
日は君故に  
輝けるリム

367 限られし

感覚器官の  
能力に  
我が認識は  
虚像を結ぶ

372 批判の矢

放てばそれは  
ブーメラン  
やがては戻り  
君を切り裂く

377 幸は

求めるでなく  
気付くもの  
ふと瞬に落ちし  
秋晴の朝

368 人生は

373 小春田の

378 仮初の